

今、求められる「キッズデザイン」

赤池 学 (ユニバーサルデザイン総合研究所所長)

未来の子孫たちとの「共用」を目指して

法整備、自治体による条例やサービスの拡充など、社会全体で次世代を担う子どもたちが安心して暮らせる社会づくりの取り組みが進んでいる。しかし、その一方で子どもの事故や子どもに対する犯罪はその数が減っていない。子どもの事故は発生して初めて議論されることも多く、リスクを未然に防ぐためのデータが不足しているのが現状である。子どもを守るためには、まず「子どもの視点」をきちんと認識し、子どもを研究し、活かされるデータ・情報の共有が求められる。

一方、企業においては、製品開発はもちろん、CSR（企業の社会的責任）への取り組みや社会貢献活動の一環として従業員が子どもを育てやすい環境を整備し、子どもへの教育プログラム開発など事業活動全般において「子どもの視点」に配慮することが求められている。

このような情勢を背景に平成18年、筆者らは経済産業省とともに、「キッズデザイン協議会」を設立した。それは、子どもの安全安心の向上と健やかな成長発達に資する生活環境の創出に向けて、有志の企業や団体、自治体が集まり、「子ども目線」「子ども基準」で、現行社会システムのリデザインを図ろうという組織体である。「子どもたちの安全・安心に貢献するデザイン」「子どもたちの創造性と未来を拓くデザイン」「子どもたちを産み育てやすいデザイン」の3つの基本理念のもと平成19年、協議会は企業・団体が業種を超えて集い合う内閣府認証の特定非営利活動法人（NPO）として活動を始めた。

さて、日本にはすでに、「みんなが使いやすい共用品開発」を意味する「ユニバーサルデザイン」というカテゴリーがありながら、今なぜ「キッズデザイン」なのか。ここで、そのいくつかの理由を語りたいと思う。

筆者は、1996年から、メーカーとともにユニバーサルデザインに基づく商品開発、施設開発を手掛けてきたが、ご存知の通り、そのメインターゲットは、「シニア富裕層」である。かくして、共用品を語りながら、そのデザインの目線は、総じて「高齢者基準」となっていた。第一に、こうした現状への反省があった。

第二は、近年改めて顕在化している「子どもの事故」への対応である。回転ドアでの挟まれ事故、プールでの溺死事故、シュレッダーでの悲惨な指の損傷、遊具や空気ポンプによる傷害事故、そしてこれから多発するであろう子ども用携帯電話ストラップによる首吊り事故、そして枚挙にいとまがない住宅からの転落死亡

事故など、過去に何度も繰り返されているが、その安全対策が放置されたままの杜撰な社会システムが数多く存在する。

また、子どもの死亡原因が、こうした「不慮の事故」であること自体を知る人もまた少ない。子どもたちの死因は、実は小児ガンなどの病気や交通事故ではない。第1位は、転落事故、第2位は、転倒事故、第3位はやけど、第4位は、誤飲事故である。まず、こうした事実を認識した上で、その原因を親たちや保育者の責任や不注意に求めず、製品や社会基盤の改善にこそ求めるべきだというのが、筆者ら協議会メンバーたちの一致した考え方である。

転落事故を起こしたマンションにドアガードを付ける、転倒時の衝撃を緩和する安全用具やインターロック材を普及させる、火が消えやすい防火タバコを開発する、誤飲を起こさせない容器形状をデザインする、といった対応は、心あるメーカーのミッションと参画により確実に形になるはずである。

これまでのユニバーサルデザインは、想定されるユーザーのうち、一人でも多くの人々が使うことができるデザインを求めるのに対して、キッズデザインは、子どもがユーザーとはならない製品、例えばシュレッダーのような業務用の機器などであっても、そこに子どもに配慮したデザインを行うことによって、その安全性を高めようとする取り組みに他ならない。そして、子ども目線に配慮したデザインは、子どもの安全性を高めるだけでなく、結果として高齢者や健常者に対する安全性もまた高めていくはずである。真っ先に取り組む必然性があるのは、実は未来の子孫たちとも共用できる、子ども目線、子ども基準の事故予防なのだ。

安全・安心知識の循環型社会を形に

このような問題意識を背景に設立されたキッズデザイン協議会の事業は、大きく分けて3つである。子ども目線での製品・コンテンツのデザイン開発を推進するための基礎となる子どもの事故情報収集・分析や、身体・行動の計測・分析などを行なう「調査研究事業」、協議会の理念を満たす製品・サービスをキッズデザイン賞という形で表彰する「顕彰事業」、キッズデザイン博を中心としたイベントや媒体発行を通じてキッズデザインの活動を周知させる「広報事業」である。

まず、キッズデザイン協議会が展開する調査研究活動を報告したい。



キッズデザインの関係図

第一に重要なのは、子どもの事故情報の、社会全体での共有である。他社の製品に起因する事故や、他分野の製品の事故であっても、ものづくりに取り組む各メーカーが事故の情報を次のものづくりにつなげ、より安全性の高い製品の普及を目指していきたいと考えている。そこでは、子どもの身体寸法や行動の特性など、製品の安全設計に必須な情報を協議会会員間で相互に共有すべく、経済産業省、産業技術総合研究所、人間生活工学研究センターとともに、子どもの指の大きさを含めた子どもの身体寸法の計測、分析研究を進めている。

具体的には、遊具や公共施設、家庭内における事故の検証と課題解決を果たした「セーフコミュニティ」の具現化ワーキング、身体寸法、認知、感性を活用した商品開発や子ども見守り技術の研究開発、照明空間や電磁波空間の身体影響研究、そして創造的エンターテインメント技術の研究開発ワーキングなどが分科会ごとに展開されている。

こうした調査研究事業は、基本となる知識や技術の習得を狙いとする「講座」や「セミナー」等を開催するとともに、それらを応用・実践して社会に対する価値を生み出す自主的な「プロジェクト」を、会員自らが立ち上げ・実行している。

現在、5つの対象領域を定めて活動を行うとともに、社会情勢に対応して定期的な方向を見直しながら、対象領域を拡大あるいは集中させ、変わりゆく社会のニーズに応えている。

「子ども事故サーベイランス領域」では、会員企業や関係機関等との連携により、繰り返される子どもの事故や事故に至らなくとも危険を感じた、いわゆる「ひやりはっと」の情報に基づいて、社会として対応すべ

き課題を抽出し、対応策の検討を多角的に行ない、会員各社の事業活動を通じてその成果を活用している。

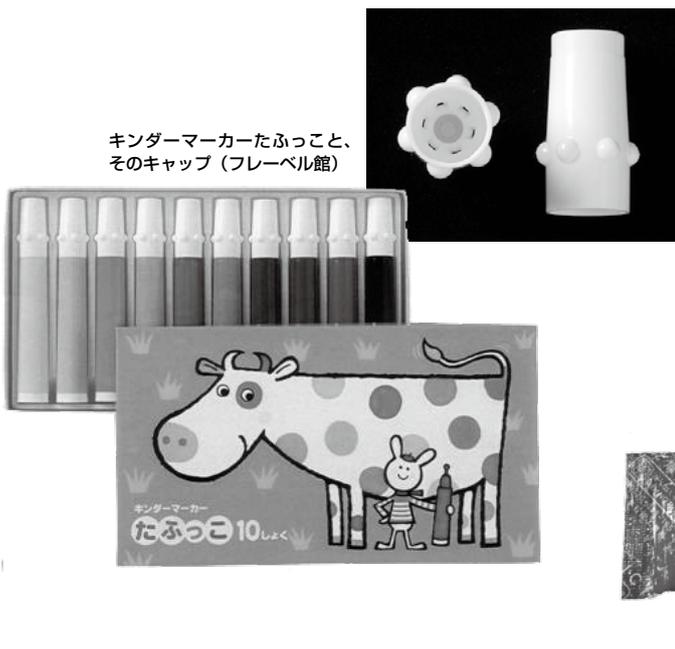
「子ども身体測定領域」では、各組織・企業等と連携し、子どもの身体測定に関わる新たなノウハウ、測定技術、計測データ蓄積の方向性等を研究・開発し、その活用の可能性を探っている。そこでは、産業界の保有する様々なノウハウとの融合による子ども身体特性のスタンダード構築も視野に入れている。

「子ども見守り領域」では、子どもの生活環境におけるさまざまな危険に対して、社会が「見守る」とともに、子どもが「身を守る」ことができる環境づくりのための調査・検証・提言活動を行っている。

「次世代育成領域」では、次世代を担う子どもたちにとって本当の「力」となるものは何なのだろうかということを実感にとらえ、その力を育むための活動プログラムを研究、開発している。近年、活動プログラムは企業間、産官学の連携、公共文化施設などで盛んに実施されているが、その全体像をキッズデザインの一つとして捉え、よりよいプログラムデザインのあり方を探っている。

「子ども住空間領域」では、子どもの健全な成育を支援する環境、空間に関する情報の収集とその提供を行い、製品・サービス開発に役立てている。新しい技術等のハード面と、ライフスタイルや教育等のソフト面とのバランスを考慮し、子どもを取り巻く環境・空間を総合的に捉えて研究を推進している。

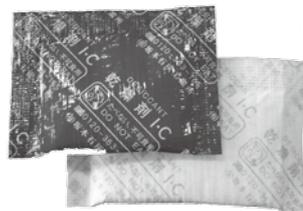
上記の5つの領域は特定のテーマに基づいてさらにプロジェクトという形で分化され、企業を中心に自主的なグループが調査・研究を進めている。研究成果は広報事業などで発信、発表され、社会への情報提供に寄与するとともに、各企業の製品開発、サービス開発



キンダーマーカーたふっこ、
そのキャップ（フレール館）



ドクターベッタ哺乳びん
（ズーム・ティー）



石灰乾燥剤
（坂本石灰工業所）

の基礎的な資料として利用されている。これらの情報が、経済産業省とともに進めている、『安全知識循環型社会構築事業』の骨子となっているのである。

2007年、「キッズデザイン賞」の始動

協議会では、ここで収集・発信される情報をものづくりに活かして行くとともに、安全対策が施された製品や施設の普及のために、2007年度から「キッズデザイン賞」も創設した。医師、研究者、デザイナーなどの有識者により審査された案件にキッズデザイン賞を授与し、その受賞作品に「キッズデザインマーク」の付与を行おうというものである。ちなみに筆者は、その第1回、第2回、第3回の審査委員長を務めてきた。

キッズデザイン賞の応募対象は、製品や設備に留まらず、コンテンツやシステム、企業や自治体等のコミュニケーション活動、大学や研究機関などのリサーチ活動なども対象としている。また、子どもの事故は乳幼児用品や玩具に限らず、子どもがユーザーとは想定されていないものも事故の原因となっていることから、子ども向けの製品に限らず、子どもたちの生活環境を取り巻くすべての「もの」、「こと」を対象としているのが特徴である。

部門は「商品デザイン部門」「建築・空間デザイン部門」「コミュニケーションデザイン部門」「リサーチ部門」の4つで、応募対象は新たに発売された製品やサービス等でなくても、基本的に国内で入手できるものなら過去に発売されたものでも全て可能としている。そして、キッズデザインの考えに最も優れたもの

に「キッズデザイン大賞」、時代を映すテーマに優れたものに「金賞」、各部門で特に優れたものに「部門賞」などの上位賞を設定している。受賞作品は毎年8月に開催される「キッズデザイン博」で一般に展示、公開されるほか、広報媒体や地方巡回展などを通じ、広く消費者、自治体、企業などに周知を行っている。

評価のポイントはすでに述べた協議会の3つの理念に則っていることが前提で、開発の際の課題発見とその解決策が施されているか、過去の事故事例などに学んでいるか、新たなコミュニケーションの手法が見られるかなど、デザイン性に加えて、開発の考え方やプロセスを重視していることが特徴である。

いくつかの受賞案件をここで紹介してみたい。

第1回キッズデザイン賞の経済産業大臣賞セーフティデザイン賞を受賞したのは、フレール館の「キンダーマーカーたふっこ」である。小さい子どもがグーで握ってぐいぐい書いても、ペン先が潰れにくく、キャップにはツブツブの凹凸が付いており、指の力の弱い子どもでも空けやすく、転がりやすく紛失しにくいデザインになっている。最大の特徴は、万一キャップを飲み込んでしまっても窒息しないように、キャップに6つの通気孔が付いていることである。

また、経済産業大臣賞マタニティデザイン賞を受賞した製品に、ズーム・ティー社の「ドクターベッタ哺乳びん」がある。頭を起こした授乳スタイルは、ヒトが自然に行ってきた母乳授乳の姿勢である。このスタイルでの授乳を可能にしたこの哺乳瓶は、頭の寝かしすぎによる耳管へのミルクの流れ込みを防ぎ、乳房さながらのボトルのカーブが授乳時の気泡を授乳口から

遠ざけ、空気の飲み込みも防いでくれる。私はちなみにこの哺乳瓶を、「母乳瓶」という愛称で呼んでいる。

第2回キッズデザイン賞でセーフティデザイン賞を受賞したのは、何と包装された食品パックに必ず入っている、あの乾燥剤である。食品とともに封入されている石灰乾燥剤は、水に触れると300度にもなる性質を持っているが、その危険性は多くの大人たちにも知られていない。また、文字の読めない幼児にとって、「食べられません」の現行警告表示自体がそもそもまったく意味をなさない。坂本石灰工業所は、自社製品のこうした課題に気づき、子どもが誤って食べても、発熱し、火傷をすることのない石灰乾燥剤を開発したのだ。

また、商品デザイン部門賞を受賞したのは、ビニールプールである。夏に子どもたちが遊ぶビニールプールでの事故は、実は溺れること以上に、転倒事故が多いのだ。柔らかいプールの縁に座り、撓んだ拍子に後方へ転倒し、後頭部を打って、重篤な事故へと至るケースが少なくない。ジャクエツが開発した「ワンタッチプール200」は、空気を入れ、簡単に膨らませる従来機能を残しながら、ビニル素材にポリエステル樹脂を編み込んでエアボード化し、プールサイドの安定度を高めたビニールプールを開発したのだ。

海外から注目される 日本発のキッズデザイン

ここで、キッズデザイン開発のポイントについても簡単に整理しておきたい。

まず、第一に重要なのは、子ども自身や保護者のニーズ、保育園・幼稚園・小学校などの現場の声を聞くことである。モニターなど、協力者との意見交換、繰り返しユーザー・テスト、保育園・幼稚園などの訪問を通じた意見交換や行動観察などを、開発に先立って形にすべきである。

第二は、子どもの寸法・行動の特性を知ることである。子どもは、大人の「スケールダウン」ではない。子どもの身体や足の寸法・形状の計測、歩行やトイレの使い方、遊びや道具の使い方などの観察・計測がキッズデザインには不可欠である。

第三は、事故情報やクレームの、関係者間での共有である。事故情報やヒヤリハットの情報の積極的な収集と共有、ITの活用、書面の蓄積、生産における不良品、その原因などの共有がそれにあたる。

第四は、先端技術や匠の技能、ベテランや専門家の経験や知見、他目的の素材などを活用することである。

大人向けなど、他の分野で活用される技術や素材の活用、営業、調達など、ユーザーや市場動向及び外部技術などに詳しい人材の活用、そして最も重要なのは、医師や有識者・研究者との共同研究を開発に先立って

行うことである。

最後にキッズデザインの市場性と可能性についても簡単に触れておきたい。

従来から、少子化・高齢化の進展の中で、子ども向けの製品・サービス・設備などの「伸び悩み」が指摘されてきてはいるものの、安全安心、機能の付加価値や差別化の一層の展開は、さらなる市場の広がりや深化をもたらすものと感じている。

また、キッズマーケットは、両親、祖父母、叔父、叔母だけでなく、結婚していない母親の女友だち、お孫さんのいない祖母の友人など、そのポケットが多いこともマーケット調査で明らかになった。さらに、キッズに対する支出は、収入や景気動向に関係なく、一定額が費やされることもわかっている。

特筆したいのは、海外メディア、国際フェア・展示会・イベントなどでの発信に対して、中国や韓国、欧米の評価が極めて高いことである。製品・サービスのグローバル化が進む中で、「子ども目線」の製品・サービスのグローバルな展開は、日本発の標準としてビジネスを開拓してだけでなく、世界規模での子どもの安全安心と健やかな成長発達を支えることにつながっていくと確信している。

さらに、「子ども目線」(Through Kids Eyes)による安全安心の対策は、高齢者・障害者をはじめとする大人にとっての安全安心の向上ももたらすこととなる。そして、キッズデザインという次世代への温かいまなざしは、「もの」の充実から「ココロ」の充足へと、あるいは、「ものづくり」から「ものがたり」へと、「感性」価値の創造を通じて、さらなる市場の展開を図ることができるものと考えている。

いずれにしても、子どもたちには、限りない可能性がある。そんな子どもたちが事故に遭遇して命を失えば、それは高齢者以上に多くのものを失うことも言うまでもない。

すなわち、最も高い危険性にさらされているキッズ、事故予防の恩恵を最も受けていないキッズ、そして安全性に対して最も「感度の良いセンサー」であるキッズに注目し、日本を優しくするトータルデザインを形にしていきたい、こうしたキッズデザインに是非、本誌の皆さまにも参画して欲しいというのが、筆者らキッズデザイン協議会会員たちの心からの願いである。

※キッズデザイン協議会ウェブサイト <http://www.kidsdesign.jp/>

■プロフィール

赤池 学 (あかいけ・まなぶ)

1958年東京都生まれ。筑波大学生物学類卒業、静岡大学大学院中退。ユニバーサルデザイン総合研究所の所長として、環境・福祉対応の商品・施設・地域開発を手掛ける。経済産業省が所管するキッズデザイン賞の審査委員長を務めている。